名古屋学院大学論集　言語・文化篇　第32巻　第2号　pp. 73–92

〔論文〕

予測・推測の様相表現を含む疑問文の容認可能性について*

宝　島　　格・今　仁　生　美

名古屋学院大学商学部 / 外国語学部

要　旨

本論文では，予測・推測や可能性にまつわる様相表現について，特に疑問形になった場合の容認可能性がどのような要因に影響されているのかを取り上げ，自然言語を扱う人間の脳を計算機に再現させるという立場から，計算の複雑さを避けようとする傾向や，推測を行う主体についての認識，会話の当事者の知識状況についての認識が，容認可能性の可否の多くを導くことを示した。

キーワード：様相表現，推測，疑問，自然言語理解，計算機

On acceptability of interrogative sentences with epistemic modality

Itaru TAKARAJIMA, Ikumi IMANI

Faculty of Commerce / Faculty of Foreign Studies
Nagoya Gakuin University

＊本研究はJSPS科研費JP20K00586（基盤研究C）の助成を受けている。　　発行日　2021年3月31日

はじめに

様相表現（モーダル）と呼ばれるものは，通常の命題と同様に扱うことができず，これまでにもいくつかの扱い方が提案されてきた。これには，義務や，可能性・予想などの判断に関する表現が含まれるが，本論では特にこの可能性・予想などの判断の表現を問題にしたい。

可能性に関しては，よく知られている扱い方として，可能世界を用いるものがある。これは例えば

（1a） Aに違いない。
（1b） Aかもしれない。

という発話がどのような意味を表すかを，その真偽を定めることによって定義する方法で，それには「可能世界」を並べて，その中でのAの成否の分布を見る。（1a）が真であるのは全ての可能世界の中でAが成立している（真である）とき，（1b）が真であるのは可能世界の中にAが成立しているものが存在するとき，とする。

しかしこの「可能世界」の全体が一体どのような集まりになるのかという点に関しては，どうも抽象的観念的な話にとどまっているように思われるし，そもそもこうした発話に真偽を定めることが必要なのかということにも疑問がないわけでもない。

著者らは自然言語の扱いについて一貫して，言語に対する我々自身の反応の仕方を計算機に再現させるという立場から考察を加えてきた（宝島・今仁2002，2003，2007a，2007b，2009，2012，2013a，2013b，2016，2017）。様相表現についても，どのような仕組みを計算機に実装させるのが妥当であるかという観点を前提にすると，そうした表現がどのような場面でどのような意図をもって発せられるのか，その発話が聞き手や話し手自身にどのような影響を与えるのかを中心にすべきであって，内容の真偽ということは取り立てて問題にすべきことでもない。

本論文ではこうした立場に立って，特に予測・推測に関する様相表現と疑問文の関係，とりわけ文の容認可能性について考えたい。

そのために用いる方法は専ら著者らの内省によるものであり，ある表現の使用可否やその表現の含むニュアンスとして述べているものは，著者ら自身のものである。その細かい内容は人によって異なるであろうし，著者ら二人においても意見を異にするものもあり，更には各人においても判断は刻々と揺れる。この予測・推測と疑問の組み合わさった文の容認可能性は極めてデリケートな様子を見せており，それは話し手•聞き手の心的状態に大きく依存することを示唆している。それでもこうした表現において，発話状況の限定や，話し手の意図の明確化によって少なくとも大筋において同意できそうな結果を得ることができるように思われる。

1. 問題の所在

様相表現という言葉には義務や可能性・予測・推測などいろいろなものが含まれるが，本論文では可能性・予測・推測を取り上げる。予測・推測は特に区別せずに以下では推測と呼ぶことにする。可能性という語には若干客観的な響きがあるため，以下でも区別して用いることがある。

本論文で問題にしたいのは以下のような文の容認可能性，そしてその意味である。

（2a）？　明日は雨に違いないか？
（2b）？　明日は雨かもしれないか？
（2c）　明日は雨だろうか？

ここに表れる「に違いない」「かもしれない」「だろう」などを，ニュアンスの問題はあるかもしれないが，まとめて「推測の（様相）表現」と呼ぶことにしたい。

これらの表現の容認可能性は，どのような場面で，どのような意図・ニュアンスで発せられたものなのかによって変わり，細かい文言の違いによってもそれは影響される。

例えば田窪•金（田窪•金2009）に従えば，大筋において（2a）は容認不可，（2b）は可となる。そこで用いられている原理は次のようなものである。

「Aに違いないか？」という疑問文は，「Aが真であるという前提に立って，Aかどうかを質問する」ということになるので，話し手の行為は矛盾している（ので容認不可能）ということである。「Aかもしれないか？」は「Aが真である可能性も偽である可能性もあるという前提に立って，Aかどうかを質問する」ということで，前提と質問の行為が矛盾しない（と田窪・金ではされている）。

但し「Aに違いない」という部分をひとまとまりにして，その推測が妥当であるかどうかを問う疑問文であるとするなら（2a）も容認可能となる，とされている。特に，「Aに違いないのか？」と「の」が入るときにそれが明瞭になる。

しかし，（2b）についてはどうだろうか。（2a）を不可とする感覚で聞いたとき，著者の一人は（2b）も不可のようにも感じられる。つまり，「Aかもしれないのか？」ではなく，「Aかもしれないか？」の容認可能性であって，「Aかもしれない」という推測の妥当性を聞いているのではない場合の容認可能性である。「Aに違いないか？」が不可であるのと同様の違和感がある。しかしこの判断も非常に揺れが大きく，ほぼ確実に「Aかもしれない」をひとまとまりにして聞いてしまう感覚に戻ってしまう。

この違いは，期待される返答によって区別することができよう。（2b）で期待される返答は2種類に分かれる。

（2d）　はい，雨かもしれません。／いいえ，雨の可能性はありません。

（2e） はい，雨です。／いいえ，雨ではありません。

この（2d）では返答した側は「雨の可能性が0なのか0でないのか」を質問されていると捉えており，この解釈でなら（2b）もごく自然に容認可能である。しかし（2e）のように返答することが（2b）では期待されていると，聞き手（返答側）が思った場合，（2b）は容認不可能になるのではないか。

これは質問内容が降雨ではなく，既に決定している事柄についてのものである場合，より明確になる。

（3a）？＊ 彼女は大卒に違いないか？
（3b）？＊ 彼女は大卒かもしれないか？
（3c） 彼女は大卒だろうか？

ごく素直にこの質問が発せられる状況を想像した場合，（3a）（3b）の容認可能性は極めて低いと思われる。見合い写真を見ながら発せられた場合，興味の中心は「大卒か否か」であって，「可能性」の解釈が入る余地は殆どない。（3a）はそれでも「念押し・再確認」の意味で発せられることが想像できるが，（3b）は逆にそれは難しい。「念押し・再確認」の場合，想定される文脈は，聞き手（返答側）も「大卒」の事実を直接握っているわけではなく，手持ちの情報から推論されたことに過ぎないことが，話し手聞き手に了解されている，というものである。ただ，そうした「どのくらいの情報が集まってきているのか」が意識に上ると，（3b）の容認可能性も上がる。「大卒の可能性が0だと思っていたが，0ではないのかもしれない」と心配になった（あるいは期待が芽生えた）という状況を想像すると，（3b）の質問もありうる。その場合，より明瞭には

（3d） 彼女は大卒の可能性があるか？

と「可能性」という語を使うなどするのが普通であろう。

いずれにしても，聞き手（返答側）が「大卒かどうかの事実を握っている」ことが了解されている文脈では，（3a）（3b）の質問はありえない。

そして，（2c）や（3c）のように「だろうか」はまた独特の内容を持っている。「Aだろうか？」によって問われているのは「Aか否か」であって，「Aの可能性があるか否か」ではない。もちろん返答として「Aだろう」「Aかもしれない」というものは可能であるが，これは話し手（質問側）を満足させる返答ではない。

ところがこの質問は「聞き手（返答側）が明確な事実を握っている」ことが了解されている文脈では発せられない。そのときは端的に「Aか？」と聞くからである。

では（2c）（3c）のような発話は何をしているのだろうか。

本論文ではこのような，推測の表現を含む疑問文が容認可能か否かが，どういう要因に規定されているのか，そしてまたそうした表現が何を意味しているのかを考察したい。

2. 推測・可能性の把握の難しさ

人間は推測や可能性というものについて理解するのが苦手であると思われる。少なくとも意識に上る範囲では，間違いを犯しやすいうえに常にショートカット（分かりやすい言い換え）を求めている。

従って，推測の語の連結が理解しづらい場合には，容認可能性は当然落ちる。次の例を見てみたい。

（4） ～状況～　小学校の先生である田中先生は今年6年生を受け持っていたので，順番から言えば来年度は1年生の担任になると考えられる。話し手の子供は来年度1年生になる予定である。1年生は2クラスあるので，必ずしも田中先生のクラスになるとは限らないが，田中先生が予定通り1年担任になるなら，この子を受け持つことはありうる。しかし，2年以上の担任になる可能性もあり，そうなると受け持つことはありえない。

（4a） 話し手は，田中先生が2年以上の担任になるかもしれないという噂を聞いた。できれば田中先生に受け持ってほしいと思っていた話し手の発言。
「この子は田中先生が受け持つことはありえないかもしれないのですか？」

これは言葉の結合の仕方としては全く正当なはずだが，容認できるためには十分に状況に納得しなければならない。更に次のような発言も結合の仕方としては可能なはずである。

（4b） 田中先生に受け持ってほしくないと思っている話し手が，今度は田中先生は1年生の担任になるかもしれないという噂を聞いた。
「この子は田中先生が受け持つかもしれないかもしれないのですか？」

これは最初の「かもしれない」が2クラスのうちのどちらになるかの不確定性，2つ目の「かもしれない」が何年生の担任になるかの不確定性で，それに納得するなら正当な語の連結のはずである。しかしこういう発言をする人はいない。それは，話し手の興味の中心が結局は「受け持つ」かどうかにあるのであって，単に

（4c）「この子は田中先生が受け持つかもしれないのですか？」

で十分だと感じられるからであろう。

（4b）のように，興味の中心に対応して，ショートカットつまり簡単な言い換えができる場合には，人間は多くの場合そうする。それは推測というものが扱いづらいものだからであろう。（4a）については，状況を正確に伝えようとするならば，言い換えは難しく，聞き手は状況をよく把握して正当な発言になるように自らの心を整えなければならない。

人間が推測の扱いに長けていないことが分かる例をもう一つ挙げる。

（5）　～状況～　Aは自信家で，今回の試験にも当然合格するものと自信満々である。ところがBが，まるでAは不合格決定であるかのような扱いをする。Aはこれを不満に思い，自分の能力の高さを次のように表現した。それに対してBが返答する（実はBは結果を知っていたことが明らかとなる）。

（5a）　A「そもそも，私が不合格になることがありうるのか，そこから考えてみましょうよ！」
　　B「ありうるどころか，君は不合格なんだよ！」

（5a）は「ありうる」という「可能性」についてのAの発言に，Bは直接答えずに「現実の状況」を答えることによってそれに代えている。しかし，「……どころか，」という言い回しから，B自身も直接の回答ではないことを認識している。とは言え，この「現実の状況」からは「可能性」についての結論が出せる（可能性がもちろんある）ので，直接の回答も含んだ回答になっている。

（5b）　A「そもそも，私が合格することがありえないのか，そこから考えてみましょうよ！」
　　B「ありえないどころか，君は合格していないんだよ！」

（5b）の場合はBの回答は実はおかしい。Aは可能性を問題にしているのであって，現実に合格していないからといって可能性まで0であるとは限らない。しかし，それにすぐ気付く人はそれほど多くはない。

そして，回答がおかしいことに気付く人も，（5a）と（5b）が対称に見える（「不合格」と「ありうる」に対して，「合格」と「ありえない」）のに，なぜ（5a）は正当な回答も含む一方，（5b）はそうでないのかをすぐに説明できる人はおそらく少ない。

※（5b）の回答は「結果の事実が決定した時点で，単なる可能性は事実によって上書きされる」と考えるなら，正当とも言える。つまり，「合格していた可能性もある」という主張は，不合格の事実によって否定され，「合格していた可能性」など無意味な言葉遊びだ，とする立場である。しかしこれは逆に，「可能性」を扱うのを嫌う心的傾向を表しているようにも見える。

このように推測や可能性が複雑に組み合わせられた場合，我々自身の脳内処理はうまく行かない。そのため，常にショートカットを求めているように思われる。上記の（5a）のような回答は，

その表れである。

ショートカットをする別の例を挙げる。

（6）　～状況～　Aは一緒に出かけようと誘ったBが外出を渋るので，聞いた。
（6a）　A「誰か来るのか？」

Aがもう少し人当たりの柔らかい人なら，次のようにも聞くことがあるだろう。

（6b）　A「誰か来るかもしれないのか？」

（6b）に対してBの回答は次のものがありうる。

（6c）　A「誰か来るかもしれないのか？」　B「はい，誰か来るかもしれません。」
（6d）　A「誰か来るかもしれないのか？」　B「はい，太郎が来ます。」

（6d）は回答として違和感がないが，Aの質問に直接答えていないとも言える。しかし（6d）を回答するような状況，間柄であったなら，（6c）を答える人は少ないであろう。（6c）のように可能性をそのまま答えるのは脳内の計算処理の負荷がかかるため，（6d）のようにショートカットをしてしまうということなのではないだろうか。

否定的回答でも同様である。

（6e）　A「誰か来るかもしれないのか？」　＊B「いいえ，誰も（誰か）来るかもしれなくありません。」
（6f）　A「誰か来るかもしれないのか？」　B「いいえ，誰も来ません。」「誰も来る予定はありません。」「誰も来ることはありません。」「誰も来る可能性はありません。」「誰も来ないはずです。」

明らかに脳は分かりやすい表現を選ぼうとしている。（6f）の中の，「可能性」という語は「かもしれない」という語をより認識しやすくする言い換えになっている。「可能性」という語を用いることによって「来るかもしれない」という捉えづらい内容を，ある客観的な状況として捉えやすくしていると言える。

複雑でそのまま扱えないものを，言い換えられるならばなるべく言い換えようとする心理が働くことは容易に想像できる。言い換えないままのものは耳慣れず，容認性が落ちることになるであろう。

3. 判断の根拠と主体

推測は何らかの根拠から判断するものであり,それには判断の主体がある。主体は「話し手」,「聞き手」,そして客観的にそう判断されるという意味での「一般理性」を考えることができよう。

その推測が正しいのかということについて，可能世界を用いる理論では真偽の定め方を提案している。しかし著者らの立場では，推測の当否をどう定めるかを扱うことはない。判断の主体が何らかの根拠に基づいて，外からは（そして意識の上では本人自身にも）窺い知れないアルゴリズムによって，結論を出すのである。もちろん，論理的に確実であるような推論についてはどのような結論が出うるのかが，論理学の長い伝統によって明らかにされている。しかし自然言語の扱う多くの場合には，多少なりとも不確実な結論が取り上げられるのであり，その確実性（真である確率）などは扱い方が殆ど分からない（と思われる)。

外部から見て明確に分類できるのは,判断を下した主体が誰であるのか,ということであるが,今度はこれが，発話から「誰の判断だと考えているのか」を特定することが普通は難しい。のみならず，話し手自身が誰の判断だと考えているのかを明確に意識していない。それでもおそらくは,誰の判断だと思っているのかによって疑問文の容認可能性が変わってくると思われる。但し,「誰の判断だと思っているか」自体に揺れが見られ，それによって容認可能性も揺れるということになるようである。

話し手が「だろう」と述べるとき，それが話し手の主観的判断であることは明瞭であるように思われる。

「かもしれない」は話し手の判断であるか，一般理性としてもそう判断すると話し手が思っているか，はっきりしない場合も多い。後者の場合,「可能性がある」という言い方になるとより一般理性である感じが増す。なお疑問文の場合はその主語にあたる人（聞き手など）が話し手に代わって判断主体になることもある。

「に違いない」も同様であるが，著者の感覚では若干話し手（や主語）の主観が強いように感じられる。というのは，本当に確実である結論を述べるために様相表現を使う必要はないからである。

推測に関連する表現としては「～（し）そう」「～に見える」「～ぽい」などがあるが，これらは，外部的証拠からそう判断される状況にある（但し不確実）というニュアンスが強く，誰が見てもそう判断するであろうという客観的な響きを持つ。一般理性による判断という扱いであると考えられる。

また「～しうる」は可能性を表す表現であり，これは「かもしれない」に比べて極めて客観性の強い言い方である。判断主体は通常は一般理性であると考えられる（が，時には話し手の判断と見られるものもある)。

この他，副詞として「たぶん」「おそらく」「きっと」「絶対」「必ず」などが考えられ，いずれ

も一般理性とは考えづらい表現である。「たぶん」「おそらく」は話し手の判断の響きが強く,「絶対」「必ず」は主語の判断ということになろう。「きっと」は話し手の判断だろうが，時には主語の判断ということもあるように思われる。

※もちろん，判断の主体が例えば話し手自身であったとしても,「pに違いない」と判断するからには話し手はそれ相応の根拠を持って判断をしているのであって，その根拠からは話し手以外の誰でも「pに違いない」と判断するのが妥当だ，と話し手は考えているであろう。そうでないひとりよがりな結論だと思っているのなら,「pに違いない」と結論づけること自体がおかしいことになるのだから当然である。そうするとそれは一般理性によっても判断される結論であるということになり,また聞き手もそう判断するはずだと期待することになろう。従って,誰が判断主体であるかということ自体も曖昧さをはらんでいることは否めない。

3.1　判断主体と容認可能性

さて判断主体に注意しながらいくつかの疑問文について調べてみよう。話し手が誰を判断主体と考えて発話しているかを想定して，そのような発話が容認可能かを考えてみる。

まず「pに違いない」のうち,pが固定的な事実である場合である。先の(3)について再度考えよう。

(7)　～状況～　話し手は結婚候補（彼）の見合い写真を見ながら，仲介者の聞き手に聞く。他の条件は大変よいので，大卒であるか否かに興味が集中している。聞き手は彼についての情報を詳しく持っており，それは話し手も了解している。

(7a)＊　彼は大卒に違いありませんか？
(7b)＊　彼は大卒かもしれませんか？

この場合，聞き手が確定情報を持っているのであるから，聞き手が判断主体として「大卒に違いない」「大卒かもしれない」と結論づけることはなく,「大卒である」または「大卒ではない」でしかありえない。

従って話し手が，聞き手判断主体としての「に違いない」「かもしれない」文を質問することはない。聞くならば「彼は大卒ですか？」と聞くことになるので，容認できない。

判断主体が一般理性であると想定することも，この場合には無理がある。事実として考えるならばそれは「に違いない」「かもしれない」などではなく,「である」か「でない」かであり，開示されている根拠（話し手は持っていないが，聞き手は持っている）は推論の根拠というよりは事実そのものである。聞き手判断主体の想定と同様，この解釈も困難である。

もし判断主体が話し手であると考えるなら,「大卒に違いない」かどうかを疑問に思うことは可能である。しかしそれは自問であって，他の人に「自分の判断が妥当か」を聞くことはできな

い。話し手自身の判断を，疑問文にして他者に問うことは，容認できない。
このためいずれにしてもこの疑問文は容認できないことになる。

但し，もしも聞き手（仲介者）が完全に信用できる証拠を握っていない，あるいは聞き手の人物自体が信用できないというのであれば，聞き手の判断について問いただすことができる。例えば話し手は，彼が大卒だと告げられはしたが，聞き手の判断が本当に正しいのか，再度判断を迫るという状況では，特に（7a）は発せられそうな疑問である。

（7c）「彼は大卒ですか？」 B「はい，大卒だということです。」 A「本当に大卒に違いありませんか？（間違いありませんか？）」

これは「念押し・確認」の行為である。話し手Aは，「聞き手Bの判断『大卒に違いない』は正しいのか？」を聞いているのである。「間違いありませんか？」は用いている語がやや違うが，内容は同じである。聞き手Bが「大卒に違いない」と言うのと「大卒に間違いない」と言うのは同じと考えられる。
これがもっと端的に見られる状況を挙げよう。

（8） ～状況～ 張り込み操作をしている刑事Aと部下Bが，長い監視の末，やっと目標の人物が出てきたところを見た。実際の監視はBが行っていた。目視なのでもちろん間違いがないというわけではないが，見間違うことは少ない。

（8a） B「奴が出てきました！」 A「本当に奴か！？」 B「はい，奴に違いありません！」
（8b） B「奴が出てきました！」 A「本当に奴に違いないか！？（奴に間違いないか！？）」 B「はい，奴に違いありません！」

Aの質問は，どちらも十分にありそうである。強いて言うなら，（8b）では，Aには次のような気持ちがあるようにも思われる。

（8c）（Aが「本当に奴か！？」と聞いたら，こう返答されるのではないか？）B「いやあ……本当かって聞かれても……。そりゃ目視ですからね，本当かどうかは究極的には確言できませんよ。あくまで私が奴に違いないと判断したということでね。本当かどうかなんて，そんなこと聞かれても困ります。事実に誠実に答えるなら，そのご質問への回答は『分かりません』ですね。」

この場合，Aは（8a）ではなく（8b）を選択するであろう。「に違いない」の判断主体は聞き手Bであると考えていることが見て取れる。（もちろん，Bが誠実に「に違いない」と結論づけるか

らには，一般理性から見てもそれ相応に評価できる根拠があって，一般理性が判断主体でも「に違いない」と結論づけることになろうから，判断主体が聞き手Bなのか一般理性なのかを区別すべきかどうかの問題はある。）

（7a）（8b）は「念押し」と考えないなら容認不可能である。（7b）は「念押し」と取ることが難しく，容認不可能であると考えられる。（7b）を念押しのように「聞き手Bの判断では彼は大卒かもしれない」なのかどうかを問う質問と考えることが，もしできるなら，そういう質問もありえようが，そう解釈するのは不可能である。というのは，それほどまでに確実性の低い判断を問うても中心的興味（大卒か否か）を満たすことはできないからである。我々はそんな質問をすることはせず,「大卒かどうかなんとか分かりませんか？」と聞くのが普通である（次の例を参照）。但し，もちろんかなり文脈を限定すれば，そういう質問が容認可能と思われる状況も作れないわけではない。

（7a）（7b）の発せられる状況として，聞き手（仲介者）が完全な情報を握っているという了解がない項目を質問することもある。

（7d）　彼は映画好き（えいがずき）ですか？（以下「映画が好き」でも同様）
（7e）＊　彼は映画好きに違いありませんか？
（7f）＊　彼は映画好きかもしれませんか？
（7g）　彼は映画好きでしょうか？
（7h）　彼は映画好きかなあ？（映画好きですかねえ？）

聞き手がお見合いをセッティングするということなら，（7d）のようにキツい聞き方をしても怒られないだろう。しかし確定情報を持っているかどうか分からないという文脈で，このような「確定情報を求める」質問はぶしつけであり，人によっては「そんなこと知るか！」と言われそうである。従って質問としては可能だが，普通は（7g）（7h）のように語調を緩和した聞き方をすることになる。（7g）の「でしょうか？」が語調緩和に使われる仕組みについては更に研究が必要だが，これが最もありそうな質問である。これは（8a）ではなく（8b）を使う心理と共通する。

このときに，（7e）（7f）のような聞き方をすることは殆どありえない。興味の中心が「映画好きか否か」であり，それについて情報を得ようとするときに，「確定的でないことを前提とした聞き手の判断」を問うのは回りくどすぎる。もし話し手が「聞き手は確定情報を持っているのか分からないが，確定情報がないのなら（映画好きかどうかを）確言できないだろう」と考えているのなら，普通の行動は「まず情報を持っているか否か」を問うのであって，「に違いない」「かもしれない」という判断をいきなり問うことはしない。（7e）（7f）を問われたときの聞き手（仲介者）の反応は，「情報があるともないとも言っていないのに，いきなり情報なしの前提か！しかもなにがしかの判断ができると決めつけてくるのはどういうこと！？」ということになろう。

従って，ステップを踏んで，「確定的なことは言えないにしても，それでもある程度の参考としてあなた（聞き手）の判断を教えてほしい」という文脈に至ったならば，（7e）（7f）も容認可能となるだろう。そのときでも不確定前提であるからには（7e）はかなり困難である。

「に違いない」「かもしれない」という語を含む疑問文の容認可能性について，よく見られるのは，実際に確言できない未来についての質問である。例えば最初に（2）で取り上げたものであるが，

（9a）？　明日は雨に違いないか？
（9b）？　明日は雨かもしれないか？

のような質問は「雨である」「雨ではない」と確言できる内容ではない。しかも現代では「降水確率」として表示されるように，内容自体が「ほぼ確実」「ある程度可能性がある」「可能性は低い」と，客観的に「可能性」が与えられる文脈に置かれるものになっている。従って一般理性を判断主体として（9b）のような質問「理性のある人なら誰でも『雨かもしれない』と判断する状況であるのか？」を問うことは容認しやすい。（それでも（9a）の「に違いない」は「ほぼ確実」より更に高い確実性を保証する表現であるため，むしろ「明日は雨か？」と聞く方が自然であり，（9a）の容認可能性は落ちる。）

しかし内容が未来のことであっても，「降水」ではなくもっと確言できそうなもの，例えば会議の予定などであったら，判断は変わってくる。

（10a）？　会議は明日に違いないか？
（10b）＊　会議は明日かもしれないか？

（10a）が容認可能であることが可能であるとしている（印「？」を付した）のは，「念押し」の場合があるからであって，そうではなくいきなり会議予定について問う場合は，容認不可能である。（10b）も同様に，そこまでに特定の会話の文脈がなければ，容認不可能である。（10）は未来のことであるが，状況は（7）の場合と同じである。

このように，「かもしれない」などの判断が，質問内容自体に含まれている（一般理性によって可能性が判断される）場合と，聞き手や話し手の脳内で確信度合いが決められる場合（その仕組みはブラックボックスである）とは区別しなければならない。しかもそれがどちらなのかは我々自身も明確に区別できておらず，そのために容認可能性は非常に揺れやすいことになる。ただ，もし話の内容が（10）や（7）のように「可能性を含まないはっきりした事実」であるなら，「かもしれない」等の判断主体は話し手や聞き手に限定されるので，このような状況では容認可能性が落ちることが概ね簡単に了解できる。（それでも特殊な文脈を設定すれば，話の内容に可能性を含めることができ，そうなると容認可能な解釈が生ずる。）

3.2 「だろう」と「だろうか？」

推測の表現のうち，「だろう」はかなり特殊なものと考えられる。

「pだろう」は「pである，但し推測であって絶対確実というわけではない」という内容を表している。その推測は話し手が判断主体である。

「だろう」を疑問形にした「だろうか？」の場合も，「かもしれない」等とは異なり，聞き手の判断とみなすことは難しいように思われる。(7) の文脈を考えてみたい。但し言葉遣いの違和感をなくすために男女を入れ替えて，話し手は男性であることにし，

(11a)　彼女は大卒だろうか？

と発話した場合，この「だろう」は「聞き手が大卒だろうと判断する」であるとは思われない。ある程度会話が進んで，

(11b)　A（話し手）「彼女は大卒か？」 B（聞き手）「うーん，どうだったかな……。うろ覚えなんだけど，履歴書を見た記憶からは，学歴欄は高卒では終わってなかった気がする……。」 A（話し手）「彼女は大卒かもしれない（の）か？」

のように，「かもしれない」が容認できる文脈になったとすれば，この「かもしれない」は聞き手または一般理性と考えられるが，その文脈に至っても，(11a) の「だろう」の判断主体は話し手であるように感じられる。

既に (7) でも述べているように，話し手自身の判断を，質問文で聞き手に問うことは当然ながらできない。例えば

(12a)　A（話し手）「僕，これ，嫌かもしれない……かな？」 B（聞き手）「知らんよ。あほか。」

は会話としては面白みがなくはないが，通常の意味で容認可能ではない。

従って，「だろう」を疑問形にした「だろうか？」は，通常の会話文においては本来容認不可能になる運命にあるはずであるが，これはごく自然に使われる表現になっている。

著者らはこれを「自問」であると考える。自分の判断を自分に問うということであり（それは自信のなさを反映しているわけだが），可能な用い方と言えよう。(「だろう」「だろうか」についての研究は多くあり，「だろうか？」の用法も詳しく見ると大変多くに分類されているようであるが，その中にも「自問」という分類がある。)

自問が通常の会話文に出現するのは奇異でもあるが，自問を表明することによって，聞き手にこの自問への参加を促すという機能を果たしていると考えられる。これをここでは「疑問の共有」と呼ぼう。(11a) において話し手は独り言を言っているのであり，聞こえるように独り言を言う

ことで，聞き手に善意で参加してくれるよう促しているのである。「ともにこの疑問に立ち向かおう」という促しである。

そもそも現代では「だろうか？」がそのままの形で会話で使われることは少ない。それがそのまま使われるのは，本論文のような「書き言葉なのだが読者との会話を意識した文章」である。そもそも「だろう」そのものも，節として会話に含まれることはあっても，発話が「だろう。」で終わることは現代では少ない。（もちろんそこから派生した特殊な響きを持った言い方としては使われうる。それは普通に使われることがないことの裏返しとも言えよう。）

「pだろう」は絶対確実にpだという判断ではないので，その判断を信用するならば「pである可能性も，pでない可能性もある」という知識が導き出せる。これは「pかもしれない」と共通している。（もちろん「pに違いない」も細かいことを言うなら「わずかだがpでない可能性も排除できない」という不安が含まれているとも取れる。）もちろんその核心の度合いは「pだろう」の方が強いと理解されるのが普通である。

しかし,「pだろう」は「pかもしれない」とは程度以外に性質の点で異なっている。「pだろう」の主張の内容は「pである」ということであって,「pと非pのどちらもありうる」ということではない。それは以下のやり取り

（13a） A「優勝は甲高校だろうね。」 B「いいや，乙高校だろうよ。」
（13b） A「優勝は甲高校だろうね。」 ？B「そうだね，甲高校かもしれないね。」
（13c） A「優勝は甲高校かもしれないね。」 ＊B「いいや，乙高校かもしれないよ。」
（13d） A「優勝は甲高校かもしれないね。」 B「いいや，甲高校のわけがない。」

において,「かもしれない」は可能性の有無を述べていることが見て取れるのに対し,「だろう」は確言はしないものの明確に主張を述べているという扱いがされることからも分かる。甲高校が優勝しなかった場合には（13a）（13b）の主張は「誤り」とされるのに対し,（13c）（13d）の主張は必ずしも明確な「誤り」とされるわけではない（もちろん文脈によっては指弾されうる）。

なお（13b）のBの返答は実際に見られそうなものであるが，これはあえて直接同意することを避けることによって，実は否定的であることを匂わせているので，直接の返答としては容認できないものと言える。

このように「だろう」は「かもしれない」とは異なり，判断主体が話し手であることから動かず，そしてまた「かもしれない」とは異なり，明確に主張を述べている表現である。つまり,「pだろう。」は言い換えるなら「私の判断はpだ。但し絶対確実と思っているわけではない。」ということになる。

このため「pだろうか？」も「私は絶対確実ではないにしてもpと判断する……ということは正しいのか？」という疑問（あるいは不安）であると理解できよう。つまり「pだろうか？」が

問うているのは「pなのか？」であって，「pの可能性があるのか？」ではない。そして話し手自身の主観的な「私の判断」の正しさを問題にしているからには，他者に問うことはできず，自問という形を取らざるを得ないということになる。

3.3 「でしょうか？」

さて自問の形で「pか？」と述べる場合は「pだ」について疑問を呈しているわけであるが，同じく自問の「pだろうか？」はあくまで「私の判断ではpだ」という内容に疑問を呈しているのであるから，単なる「pか？」に比べてよりへりくだったニュアンスを表現できることになろう。「あくまで私の判断では」という曖昧性を加味することによって，語調を緩和するわけである。

単なる自問で「pなのか？」と言うときと「pなのだろうか？」と言うときで違いがあるようには感じられない。しかし語調が緩和されるとなると，聞き手に発するときに

（14a）　このバスは中央駅に行きますか？
（14b）　このバスは中央駅に行くでしょうか？

という使い方ができる。（14b）は（14a）と内容に違いがあるとは考えられないが，語調は緩和されている。この「でしょうか？」の用法は広く行き渡っており，本来の推測の表現という出自を感じることは難しい。著者らはこれを自問の「だろうか？」から（自問をあえて聞こえるように発話する）疑問の共有の「だろうか？」へ，そしてそれによって答えを求める単純な質問の「だろうか？」への進化ではないかと考えているが，歴史的経緯について検証したわけではないので，今後の研究をまちたい。

なおこの用法では「でしょうか？」は用いられるが「だろうか？」はほぼ確実に用いられない。それは語調を緩和してまで質問するような相手にぞんざいな言い方をすることがないからであろう。

なお（14b）の「でしょう」は既に推測ではなくなっている。この質問に「手持ちの証拠から『行くでしょう』という推測をするのは妥当な判断ですが，実際の結果は知りません。」と答えるのは不誠実である。いまや単なる語調緩和に過ぎないと思われる。同様に，自問の「だろうか？」も「だろう」の疑問という由来を離れて「だろうか」でひとまとまりの意味を持つようになっていることは考えられる。

3.4　間接疑問等

推測の表現の疑問形が文内に含まれている場合についても検討したい。

まず間接疑問である。

（15a）　彼は大卒（なの）か（を），考えてみよう。
（15b）？　彼は大卒に違いない（の）か（を），考えてみよう。

（15c）＊　彼は大卒かもしれない（の）か（を），考えてみよう。
（15d）＊　彼は大卒だろうか（を），考えてみよう。

これらのうち（15d）はほぼ確実に容認不可能である。それは「だろう」が話し手の主観的判断であって，客観的に考察する対象になりえないからであると思われる。「○○を考える」という際の「○○」に相当する部分は客観的に独立した事項であるものと受け取れるが，そうすると「○○」内に含まれる推測の表現の判断の主体は一般理性であることになる。従って話し手が判断主体の「だろう」はここには入りえない。

（15c）もおそらく容認不可能である。彼の大卒性は確定した事項であって，「大卒である可能性」というものが想像しにくいからである。

（15b）も同様に容認可能性が低い。但し，この場合には「大卒か否かの事実を確定することは，得られる証拠からは判断困難であることが了解済み」という前提で「確実ではないけれども何とか結論を出したい」というときには容認できるかもしれない。表現は違うが，

（15e）（？）　彼は絶対大卒なのか，考えてみよう。

とした場合，単に「大卒なのか考える」と言う場合よりも確実性の高さを詳細に評価しようという意図が伝わるようにも思われる。（但し「絶対」の判断主体が話し手であるという意識が強いと，容認可能性は落ちる。）

なおこうした前提にあっても，（15c）はやはり容認不可能である。それは，「大卒かどうかを考える」という状況は「大卒かもしれないし，そうでないかもしれない」と思っている状況であって，そのときにわざわざ「大卒かもしれないかどうか」を考える必要はないからである。「大卒かもしれないかどうか」を考えることと，「大卒かどうか」を考えることは同じである。（特殊な文脈ではこれが異なる場合もあり，その場合には容認可能になる可能性はあるが，それでもなかなか直観的に把握できないであろう。どうしてもショートカットしてしまうものである。）次のように言葉を変えても容認不可能であることが分かる。

（15f）＊　彼はおそらく（たぶん）大卒なのか，考えてみよう。

「大卒なのか考える」のは「おそらく大卒なのかを考える」のと同じであって，不必要に推測が重なることは容認しがたい。（但しこれは，「おそらく」「たぶん」の場合，判断主体が話し手になるということが要因であるようにも思われる。）

間接疑問でも，客観的「可能性」（つまり判断主体が一般理性）が明瞭に意識される内容・文脈なら容認可能性は上がる。

（16a） A「この部屋は施錠してもいいですか？」 B「そうですね……。誰か来るかもしれないか，聞いてきます。」
（16b） A「傘を持って行かなくていいですか？」 B「そうですね……。雨が降るかもしれないか，天気予報を確認します。」

のような場合,「来客•降雨の可能性があるか, ないか」という「可能性」は明瞭に意識されやすく，容認可能である。確実に来客・降雨があるという答は通常望めないことが了解されているので，「可能性」の意識は強い。

こういう状況はデリケートである。

（16c） 雨が降るかどうかに注意して準備を進めよう。
（16d）？ 雨が降るかもしれないかどうかに注意して準備を進めよう。

通常は（16c）でよいのであろうが, 時には（16d）のように表現したい場合がある。（16d）は「雨が降るかどうか」そのものよりは,「雨が降る可能性が0でないか，それとも0か」という，より厳格な基準に従っているという意識があるなら容認可能である。イベントの準備などをする場合，雨に対応することが必要なのはもちろんだが，準備の段階で雨かどうかが確定していないことが殆どである。しかし完全に雨の可能性がないのと，わずかでも雨の可能性があるのとでは準備の仕方が変わってくる。その場合には（16d）のような表現が適切であって，（16c）では表現不足であろう。

さて別の形で文内に埋め込まれた推測の疑問を考えよう。

（17） ～状況～ 中日ドラゴンズの球場近くで，試合後の帰宅客を見かけた。

（17a） ドラゴンズが勝ったのか，うれしそうな人が多い。
（17b） ドラゴンズが勝ったのだろうか，うれしそうな人が多い。
（17c）＊ ドラゴンズが勝ったのかもしれないか，うれしそうな人が多い。

（17a）を（17b）のように言うことはおそらく可能と思われる。話し手自身の判断を自問しているので，疑問形は容認でき，両者の内容は全く同じである。語調は（17b）の方が緩和されている。

これを（17c）のように言うことはおそらくできない。「かもしれない」の判断主体が誰であっても，疑問形を作ることに問題はない。しかし，（15c）と同様に,「勝ったのか」だけで「勝ったのか負けたのかは確定させるには検討が必要」であることを含んでいるので,「勝ったのかもしれないか」では冗長表現となる。相当限定された文脈でなければその繰り返し(「かもしれない」

と「○○なのか」)の必要性が得心できないのであって,このような複雑さを脳は拒否するであろう。
若干違う文脈で考えると，違った結果になる。

（18） ～状況～　中日ドラゴンズは地球の反対側で世界一決定戦を戦っている。相手は現地のチームである。その国は情報統制をしており,リアルタイムで試合状況を知るのは難しく,わずかに得られる兆候から,勝敗を推測するしかない状況である。試合時間は終わったが,その国のテレビ放送ではなんらお祭り騒ぎのようなことが起こっていない。話し手は多くの人とそれを一緒に見ていた。そのときの周囲の人たちの様子について述べた内容。

（18a）＊　ドラゴンズが勝ったのだろうからか，うれしそうな人が多い。
（18b）　ドラゴンズが勝ったのかもしれないからか，うれしそうな人が多い。

今度は（18b）では「ドラゴンズが勝ったのかもしれない」がひとまとまりの客観的事実として確定している。そして「それが理由なのか,うれしそうな人が多い。」と述べているのであり,「○○か，うれしそうな人が多い。」の「か」によって疑問になっているのは「理由であるかどうか」である。「かもしれない」の不確定性について「か」で考えてみようとしているわけではない。従ってこれは容認可能である。

一方,（18a）は逆に，客観的事実にすべき部分が「だろう」によって話し手の主観的判断にされてしまっている。話し手の主観的な「勝ったのだろう」に対して周囲の人が嬉しく思っているわけではないので，容認不可能となる。それは同じ状況で以下の文が容認可能であることと整合的である。

（18c）　ドラゴンズが勝ったのだろうから，ごちそうの準備にはとりかかろう。本当にごちそうを食べることになったら（本当に勝ったことが分かったら）うれしいな。

これは話し手自身の内なる談話であるから,「だろう」で判断された内容が行動の理由となりうる。

このように，疑問形が文内に埋め込まれている場合でも，判断の主体が誰であるかということや，計算処理（文意の把握）が端的に済むかということが，文の容認可能性に影響することが分かる。

4. 結論

以上見てきたように，推測の表現と疑問形の組み合わさった文の容認可能性については，次のような要因が考えられる。

・脳の処理の負荷が大きい発話は理解度が落ちる。この結果,不必要に重なる推測の組み合わせ,複雑すぎる推測の組み合わせ（例（4）のように）は容認しづらい。また，複雑さを減らすために脳は積極的にショートカットを用いようとする（例（6）のように)。そのため，どうしても不確定性への言及が外せないときには推測の表現が入るが，外せるときにショートカットを用いないものは耳慣れず，容認可能性が落ちる。
・判断の主体が誰なのか，また会話参加者の知識の状態がどうなのかに照らして，質問することが不適切な質問は容認可能性が落ちる。但し，話者自身も判断の主体を明瞭に認識することは多くなく，その結果，容認可能性は非常に揺れやすい。
・判断主体が話し手自身である場合,その判断について（真の意味で）質問することはできない。特に,「だろうか」は自問となる。自問の「だろうか」「でしょうか」を聞き手に発することにより，疑問を共有しようとすることができ，更に「でしょうか」は疑問の共有という形を取りながら，実は正解を教えてほしいという希望を表明することにもなる。
・一般理性が判断主体となるような客観的な響きを持つ表現は，独立したひとまとまりの内容として扱われやすく，それを質問することは容認しやすい。

容認可能性には非常に揺れがあり，これらの要因がどの程度までそれを説明できるかは今後の研究にまちたい。

参考文献

安達太郎　1997,「「ダロウ」の伝達的な側面」『日本語教育』95号
安達太郎　1999,『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
大島資生　2002,「現代日本語における「だろう」について」『東京大学留学センター紀要』12.
宝島格・今仁生美　2002,「計算機による言語理解のための方策」『名古屋学院大学研究年報』15
宝島格・今仁生美　2003,「計算機による言語理解のための方策2」『名古屋学院大学論集　人文・自然科学篇』第39巻第2号
宝島格・今仁生美　2007a,「計算機における集合と個体の扱いについて」『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』第18巻第2号
宝島格・今仁生美　2007b,「自然言語における個体存在の多様性」『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』第19巻第1号
宝島格・今仁生美　2009,「図形的視点から見た「通す」「通る」の用法」『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』第20巻第2号
宝島格・今仁生美　2012,「話者の想定から見た「中」と「間」の空間的および時間的用法」『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』第23巻第2号
宝島格・今仁生美　2013a,「計算機による「中」の扱い」『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』第24巻第2号
宝島格・今仁生美　2013b,「連続性に関する話者の想定と「通る」「渡る」「越える」の空間的・時間的用法」『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』第25巻第1号
宝島格・今仁生美　2016,「発話理解における事態の構造化について」『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』第

27巻第2号
宝島格・今仁生美　2017,「自然言語における全体と部分の関係の認識について」『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』第28巻第2号
田窪行則・金善美　2009,「韓国語と日本語のモダリティ表現の対照」『朝鮮半島のことばと社会――油谷幸利先生還暦記念論文集』明石書店
鄭相哲　1993,「「ダロウカ」の意味・用法の記述―情報伝達・機能論的な観点から」『世界の日本語教育』3, 163-175.
仁田義雄　1987,「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』大学書林
益岡隆志　1991,『モダリティの文法』くろしお出版
宮崎和人　2001,「認識的モダリティとしての（疑い）―「ダロウカ」と「ノデハナイカ」」国語学　52（3）.
宮崎和人　2005,『現代日本語の疑問表現――疑いと確認要求――』ひつじ書房
森山卓郎　2002,「モダリティの再整理――確認のモダリティとその周辺――」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』13.